

Japanese Utility Model Application Unexamined Publication Gazette

Japanese Utility Model Application Laid-open No. Sho 59-105141

laid open for public inspection on July 14, 1984

Japanese Utility Model Application No. Sho 57-197360

filed on December 29, 1982

Applicant

Nippon Sherwood Medical Industries Ltd.

1. Title of the Invention

TRANSNASAL CATHETER

2. Scope of Claim for a Utility Model Registration

(1) A transnasal catheter including a weight body at an insertion end portion of a tube formed of a thin flexible material, the transnasal catheter having an auxiliary short tube slidably fitted on the insertion end portion side of the tube.

(2) The transnasal catheter according to claim 1, wherein the auxiliary short tube is formed to be removable by tearing.

⑨ 日本国特許庁 (JP)

⑩ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報 (U)

昭59—105141

⑪ Int. Cl.³
A 61 M 25/00

識別記号

庁内整理番号
6917—4C

⑬ 公開 昭和59年(1984)7月14日

審査請求 未請求

(全 頁)

⑭ 経鼻挿入用カテーテル

⑮ 出 願 人 日本シャープ株式会社
東京都渋谷区千駄ヶ谷5丁目27
番7号日本プラザウイックビ
ル5階

⑯ 実 願 昭57—197360
⑰ 出 願 昭57(1982)12月29日

⑱ 考 案 者 岡田陽介
静岡県周智郡森町一宮2748—1

⑲ 代 理 人 弁理士 秋元輝雄 外1名

明 細 書

1. 考案の名称

経鼻挿入用カテーテル

2. 実用新案登録請求の範囲

- (1) 細い軟質素材からなるチューブ管の挿入端部に錘体を設けたカテーテルにおいて、該チューブ管の挿入端部側に補助チューブ短管を摺動自在に被嵌したことを特徴とする経鼻挿入用カテーテル。
- (2) 補助チューブ短管を引裂き除去可能に形成したことを特徴とする実用新案登録請求の範囲第1項に記載の経鼻挿入用カテーテル。

3. 考案の詳細な説明

この考案は鼻腔から胃あるいは腸内に挿入されるカテーテルに関する。

従来、この種のカテーテルにおいては、細い軟質素材からなるチューブ管の挿入端部に錘体（オリーブ）を設け、該チューブ管を鼻腔から胃あるいは腸内に挿入して栄養液を供給し得るように構成してなるものが知られている。

しかしながら、このような従来構造のカテーテルにおいては、チューブ管が細い軟質素材からなることから、大きな屈曲がある鼻腔への挿入にあつて、チューブ管自体が腰が弱いため、挿入が困難であり、かつチューブの全長が通過するため不快感が大きいなどの不具合が生じていた。また、この種の不具合に鑑みて、従来チューブ管にガイドワイヤを挿入して腰を強くしながら挿入する方法が実施されているが、このような従来法による挿入手段では、ガイドワイヤをチューブ管の全長に亘つて挿入する必要があり、操作が面倒であるばかりでなく、患者により大きな不快感を与えるなどの欠点があつた。

この考案は、上記した従来欠点を解消することを目的としたもので、以下、図示の実施例に基づいて説明する。

第1図及び第2図に示すように、図中1はこの考案に係るカテーテルを構成するチューブ管である。該チューブ管1は、細い軟質の合成樹脂素材からなる可撓性を有し、その挿入端部1aには合

成樹脂で被覆された複数個の金属球からなる錘体 2 が取付けられている。そして、該錘体 2 の外径は、前記チューブ管 1 の外径より大きく形成され、該錘体 2 をストッパーとして前記チューブ管 1 の挿入端部 1 a 側には軟質の合成樹脂素材からなる可撓性を有する補助チューブ短管 3 が摺動自在に被嵌されている。該チューブ短管 3 は、手元側後端部 3 a がフアネル状に拡径されているとともに、その周面にはミシン目あるいは切溝等からなる線條部 4 が軸方向全長に亘つて複数条形成され、該線條部 4 によつて易引裂性が付与され、前記チューブ管 1 からの引裂き除去を可能にしている。また、図中 11 は 前記チューブ管 1 の挿入端部 1 a 側周面に開孔した液注入口である。

すなわち、上記したこの考案に係る構成を有するカテーテルを患者に挿入するにおいては、片方の手でチューブ管 1 の挿入端部 1 a 側に被嵌したチューブ短管 3 を握み、他方の手でチューブ管 1 を手前に引張るようにして緊張させながら、鼻腔にチューブ管 1 を挿入する。次いで、該チューブ

短管 3 が鼻腔内に挿入された時点でチューブ短管 3 の挿入を中止し、錘体 2 の自重を利用してチューブ管 1 のみをチューブ短管 3 内を摺動させながら押込むことにより胃あるいは腸内に導入し、導入後、チューブ短管 3 を鼻腔から引抜いて引裂くことにより除去してなるものである。

この考案は、以上説明したように、細い軟質素材からなるチューブ管の挿入端部に錘体を設けた経鼻挿入用のカテーテルにおいて、該チューブ管の挿入端部側に補助チューブ短管を摺動自在に被嵌してなることから、鼻腔への挿入時に補助チューブ短管によつてチューブ管の挿入端部側を腰強く補強することができ、挿入が容易にできる。また一旦チューブ短管が鼻腔内に挿入された状態の後、チューブ管のみをチューブ短管内を摺動させながら挿入することができるため、従来のような鼻腔内通過に伴う不快感が解消され、しかも挿入後はチューブ短管を引裂き除去できるため、留置中の邪魔にならないなど、実用性にすぐれた効果を奏するものである。

4. 図面の簡単な説明

第1図はこの考案に係る経鼻挿入用カテーテルの一実施例を示す説明図、第2図は同じくチューブ管の挿入端部側の要部拡大斜視図である。

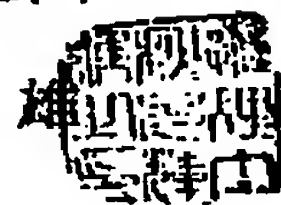
1 … チューブ管 , 1a … 挿入端部 ,
2 … 錘 体 , 3 … チューブ短管 ,
4 … 線条部 。

実用新案登録出願人

日本シャーウッド株式会社

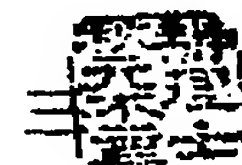
代 理 人

秋 元 輝

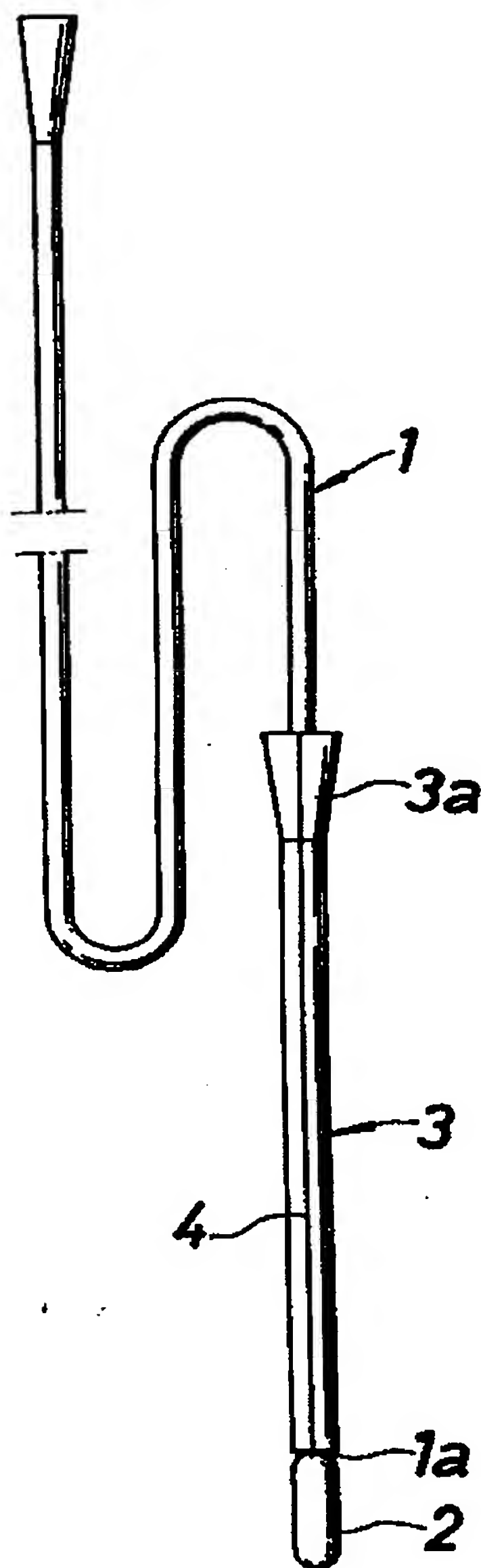


同

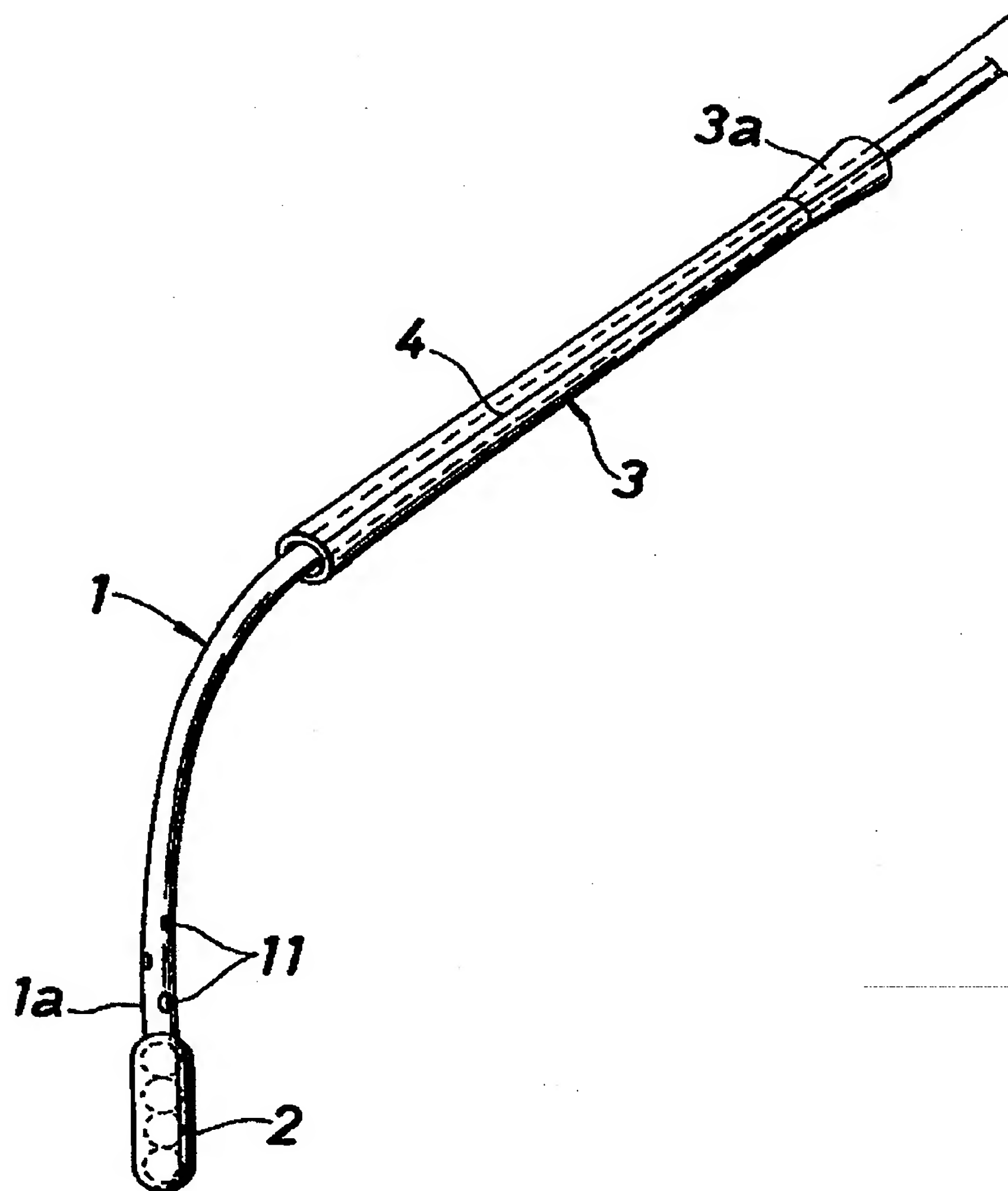
秋 元 不 二



第 1 図



第 2 図

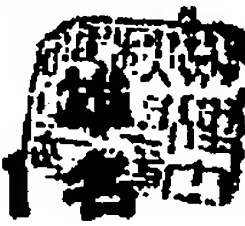


実開 59-105141

代理人

秋元

輝



外 1 名

408